

## EAACI 2008 に参加して

岩 田 力

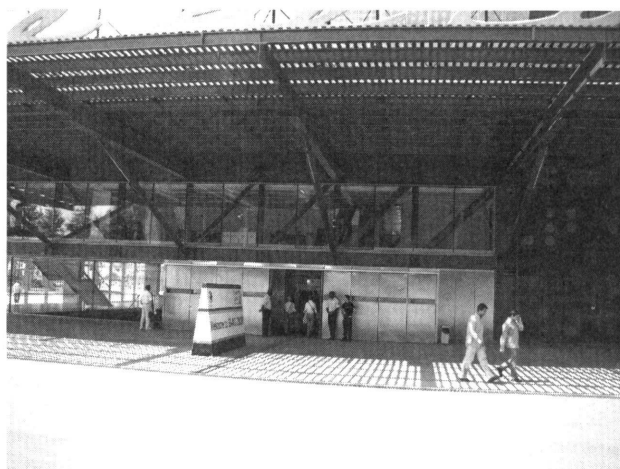
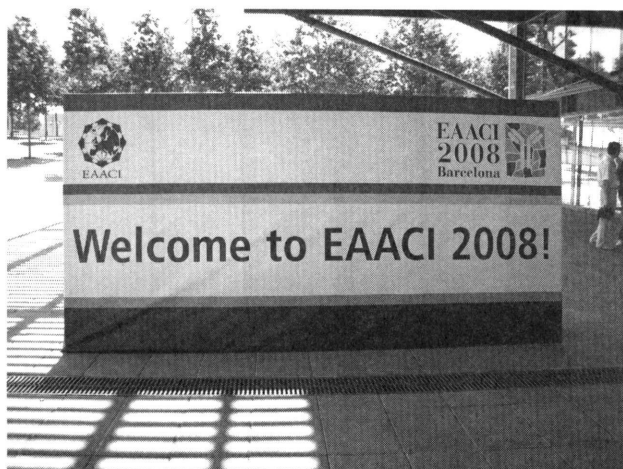
EAACI in Barcelona

Tsutomu IWATA

European Academy of Allergy and Clinical Immunology (EAACI, 欧州アレルギー臨床免疫学会)は、我が国における、日本アレルギー学会と同様の学会であり、年に1回の学術集会を設けている。欧州のそれぞれの国におけるアレルギー臨床免疫学会が担当して学術集会を開いている。2008年は、その第27回学術集会がスペインのバルセロナにて、6月7日から11日までを会期として開催された。欧州の学会であるが、様々な国からの参加者を受け付けており、実態は国際学会である。筆者は一昨年のウィーンでの学会に続き2回目の参加である。開催が欧州の国であるため、多様な文化に触れることができ、興味深い。規模は大きく、今回の学会の参加者は、聞くとところによると6000名を越えるとのことであった。学会

の運営は、そのお国柄が出るもので、プログラムの変更などの伝達が機能的にきっちりと行われる場合と、何となく人づてに聞いてわかるようなものもあるが、このバルセロナの学会は、運営も非常によいものであった。

国際学会は、通常大きな会場で多数の聴衆が参加できる plenary symposium と呼ばれる最新の知見に関するシンポジウムが目玉であるが、今回は基礎分野と臨床分野に題目を分けて、合計7つの plenary symposium と、それよりは規模が小さいものの、各トピックスに関するシンポジウムが31、ワークショップが32、そして一般演題で口頭発表に選ばれたものが169、ポスター発表ではあるが、会場を別にして短い口頭発表もするもの (poster discussion session) が394、そして、通常



会場入り口

のポスター発表が 1700 という非常に多数の発表がある大きな学会であった。さらにそれらに加えて、臨床上の様々な手技も学べる practical course が 14、製薬会社などがスポンサーとなっているシンポジウムが 5、早朝に始まる有料ではあるが朝食付きの meet the experts もあり、プログラムを見るのが一苦勞であった。一方これまでの国際学会では経験したことが無かったが、pediatric track と称して、小児の分野が一目でわかるようなプログラム配置がなされ、多数のシンポジウム等から、一目で選ぶことができ、筆者としては大変便利であった。プログラムに(P)と記号がふられその後に発表会場が書いてあるそのやり方はひとえに小児科領域の臨床家の参加が多いことを物語っていた。日本からの参加者も比較的あり、筆者のよく知っている先生方を何人も会場にてお見かけした。

本紀要をお読みになる方々にはあまりなじみは無いと思われるが、アレルギーの分野では、このようなことが関心事であるという例を、以下に少し御示しする。勿論、筆者が聞くことのできた演題は非常に限られていたし、筆者自身が興味深いと思った演題であることをお断りしておく。

アレルギー疾患の治療は、勿論薬物療法が重要であることは言うまでもない。しかし、アレルギーという反応には抗原が存在し、それに対する反応性が変化すれば、そのことは治療上有益となる可能性がある。昔から、減感作療法という名前で呼ばれ、抗原を薄い濃度でかつ少量から注射をし、次第に増量して行く治療法が存在した。例えば、スギ花粉症において、スギ花粉からの抽出液を注射して行くやり方が有名である。現在は減感作という言葉よりも、免疫療法という用語が用いられるが、欧米では我が国よりも免疫療法が盛んであ

り、その効果についての多くの報告がある。ただ、何故効くのか、どのようなやり方がよいのか、副作用が無い方法は何か、どのように簡便にできるのか、という疑問に対して答えを得るべく、多くの施設での研究が続いている。

気管支喘息がどうして発症するのか、危険因子は何か、さらに気管支喘息を発症した人が、良くなって行くのか、治るのか、という時間軸にそった観察は、疾患の病態生理を考え、かつよりよい治療法を開発して行く上で、非常に重要な研究となる。我が国の研究よりも一歩先んじている部分は、大規模な疫学的研究である。単に数が多いだけでなく、前方視的な研究が、複数、今なお進行中である。カナダのグループによる発表では、肥満は気管支喘息発症の一つの危険因子であるとした。気管支喘息の正確な診断は、乳幼児では困難なことがあるが、気道の症状を示す乳幼児のうちで、どのような背景をもっているものが典型的な気管支喘息となっていくのか、これはまだ今後引き続き解明すべく努力をしなければならない課題である。

アレルギーの反応に関与する抗原は、ほとんどがタンパク質であるが、米国からの発表で、galactose-alpha-1,3-galactose (alpha Gal)という糖類が抗原となり IgE 抗体を作らせる特殊な例が示された。面白いことに、この alpha-Gal は、多くの哺乳類がもっており、ネコ抗原に対して IgE 抗体をもっている、ネコと接触して症状を示さない場合は、その IgE 抗体は実は alpha-Gal に対するものであったという結果も示されていた。

さて、国際学会に出席する一つの楽しみは、異文化にふれることである。またその都市の歴史的な事物、風土を体験することは、得難い経験となる。バルセロナは、スペインの北東部に位置し、

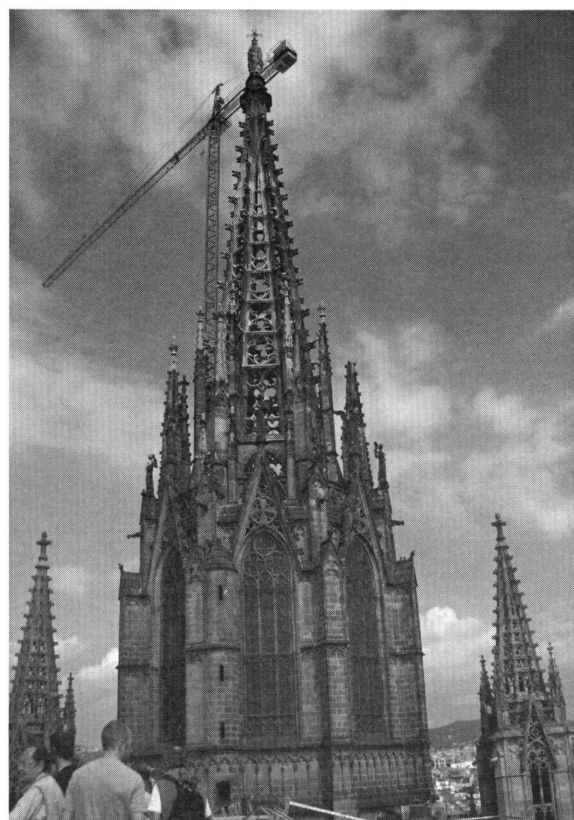
地中海に面しており、大変に美しい町であった。文化的にも、首都マドリードのある地方とは異なるカタルーニャ地方の大都市である。旧市街は石畳の狭い道が入り組んでおり、なかなか方向感覚がつかめなかったが、慣れると、歩き回ること、観光できた。一方で、オリンピックも開催しており、学会場へいくために利用した地下鉄は、その当時にだいぶ整備されたと聞く。車内は明るく、駅名の表示も大きくて、勿論スペイン語の発音はわからなくても、どこで降りればよいか、アルファベットを追って、迷うことは無かった。

バルセロナは、ガウディ (Antoni Gaudí) の町でもある。日本では、Gáudi と、ガにアクセントを付けて読んでしまうが、実は、ディの方にアクセ

ントがあるようである。多くの建築物が残っており、実際に使用しているものもあった。とんでもなく奇妙なデザインから、何かふざけているかのような表面的な印象があったが、実はそうではなく、19世紀末から20世紀初頭にかけての、新しい芸術を象徴するものであったようである。実際にその建物の中にはいると、実に精妙な建築物であり、妙に楽しくなる感じであった。一番有名な、未だ建築中であるサグラダ・ファミリア聖堂は、紛うことなき教会であった。延々と100年以上をかけて建築途中である最大の理由は、建築費用をすべて寄付でまかなうという方針であるからと言う。(会場と、ガウディの建築物の写真を示す。)



Casa Milà (La Pedrera) (Antoni Gaudí の建築物)



Temple de la Sagrada Família (贖罪の教会である。)